斎藤勝郎です。

151215　　「クレオパトラとエジプトの王妃展」の感想文です。

クレオパトラとエジプトの王妃展を観て
― エジプト学にまなぶ

先年、ビスケー湾の海風が匂うピレネー山地、フランスバスクの巡礼街道をあるいた。キリスト教三大聖地の一つとされるスペイン西北部の**サンテイアゴ・デ・コンポステラ**へのピルグリムロードはここからはじまる。

バスクはピレネーの嵐気の中から生まれ、天から降って湧いたクニといわれる。古代バスク人は印欧語族のどれにも属さない不思議な言語を話し、それは天上から響くように聴こえたという。

峠の村、**サンジャン・ピエ・ド・ポル**に生まれた**ソルヴールカンドウ神父**のエッセイの一節が思いうかんだ。

神父（1897-1955）は若くしてバスクゆかりの聖フランシスコ・ザビエルに吸いとられるように日本に渡り、生涯故国に帰ることはなかった。

バスク人 － ソルヴールカンドウ神父

サンジャンをゆく巡礼たち

『　父の命日である。次々と人が生まれたり死んだりするのは、なんと神秘的なことだろう。とくに伝統が生や死をめぐってわれわれの生活の内に造り上げたものを、第三者としてながめるときそれを感じる。

バスク地方の雰囲気、家庭の様子を思いおこしてみると、すぐにむかしながらの環境が目に浮かび、ものの感じ方、考え方、頭の働かせ方まで、ある特定の調子・色彩を帯びてくる。バスク的雰囲気の持つ特徴は、確かに平和という特色であろう　』

カンドウ神父の生家

生への洞察にあふれる感性ゆたかな名文である。

人間の思惑や理性知性を超えた霊性、それを統べる＜大いなるもの＞がこの世にはあり、伝統や文化が伝承されていくのではないか、と神父はいう。

そういえば神父の父は、息子が若くしてイエズス会士になり日本に行ってしまったことについて、

「**ザビエルの黴菌**のなかで育ったようなものだから、仕方ないさね～」と、いつも笑って述懐していたそうだ。

関連して、この村で遭遇したハプニングについて考えている。

カンドウ神父の生家 －今はブティクー の前を行きつ戻りつする初老の夫婦を見とがめたわたしの娘が、どこかお探しですかと声をかけた。

「カンドウの家はたしかこのあたりだったとおもって探してるんですが、、」

「わたしたちもです、やっと見つけたのです」

はなしが一致した。夫人が元カンドウ姓で、神父の縁戚にあたる人だったのである。

パリからの旅行で近くまで来たが、ふる里が懐かしくなって立ち寄ったのだそうだ。

なんという偶然だろう。しばらくご夫婦と話しこんだ。

カンドウ神父にくっついたザビエルの黴菌がいまだにこのバスクの村の空気のなかで生きつづけ、われわれに感染してくれたのかとおもうと嬉しくなった。

ピレネーバスクの村

霊性にみちるバスクならではの体験である。

八十路の坂

老骨を 宥めすかしつ 八十路越え

八十路の坂を越えて間もなく３年になる。

「あと何年、人間でいられるだろうか」といつもおもう。

人間でなくなれば何もかもが消えてなくなるとおもうからだ。

感性はいうに及ばず、文化の伝承など望むべくもない。

カンドウ神父は、それは違うというが、凡人はそうはいかない。

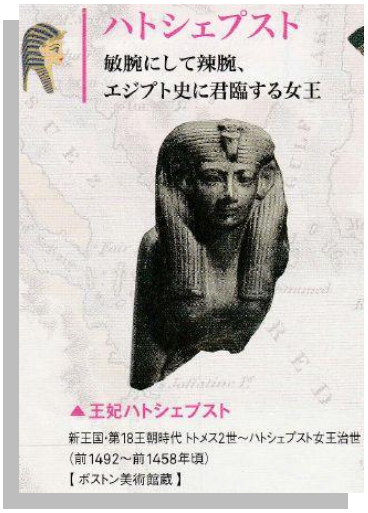
親鸞の子孫、本願寺法主・大谷暢順もその新刊本、

『 人間は死んでもまた生き続ける 』の中で、神父と同じようなことを書いている。

クレオパトラとエジプトの王妃展

先週、大阪国立国際美術館でクレオパトラとエジプトの王妃展を観た。
ファラオの国の王妃たちに光を当てた大きな催しは世界にも例がないらしい。
本稿では１０年ほど前に訪ねたエジプトの旅をなぞりながら、クレオパトラとエジプト史について考えるのが目的である。
なぜ、冒頭にバスク人のカンドウ神父が現われたのか分からない。

歴史は表面だけを見ず深層（霊性とか人間の原点）に分け入って考えなさい、ということかもしれない。
そもそも歴史が後世に残したいわゆる**史実**とは何だろうか。
人間の営みや事件というものは、それが顕在化し一定の姿かたちを見せるまでは、内在する諸要因が複雑に絡まりあっていたはずである。
万華鏡の中から一片の花びらが開いたに過ぎない。それを史実というが、歴史の奥行きは無限に深く広いのではなかろうか。
ちょうど生物が無数の突然変異をくり返す過程で＜偶然的に＞発生したのがわれわれ人類であるように。
まして後世に残った歴史は、人間が恣意的に物語風に仕立てたものである。いわば夢、幻のようなもの。
これを敷衍すれば、個人の歴史（人生）にしても、個人にとっては絶対のものに違いないが、大いなるものの前ではちっぽけなものである。

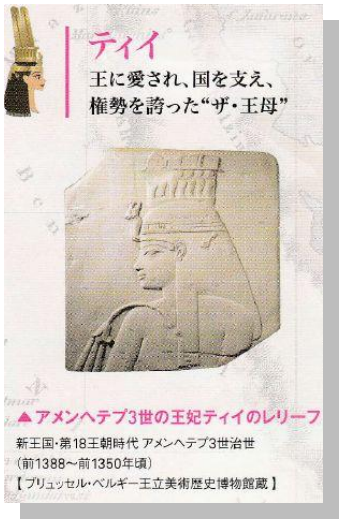


古代エジプト王妃展もこんな視点から大きく鑑賞してもらいたい、と問われているようでもある。

後宮の陰謀　－王妃たちの熾烈な闘い

歴史によれば、王妃たちは後宮で陰謀の限りを尽くしたことになっている。
トトメス２世（18王朝、在位前1492/1479）の

ハトシェプスト王妃は、病弱の王亡きあと幼少の甥トトメス３世（在位前1479/1425）の摂政として共同統治をするや、自身が女王ファラオとなって絶大な権勢をふるった（在位前1473/1458）。



が、**トトメス３世**が長ずるに及んで女王は消されてしまう。神殿の列柱や壁に刻まれた女王のレリーフが削り取られた。

また**アメンヘテプ３世**（18王朝、在位前1388/1350）の王妃の一人、**ティイ**はわが子を後継王にすべく後宮のみならず王宮の神官・高官たちにも八方手をまわし、王の抹殺を企てた。そして実行した。

一神教を奉じて、多神教の神官たちがはびこるテーベから一時期アマルナに遷都し、神官政治と対峙した**アメンヘテプ４世（イクナートン）**はティイの子である。歴史の皮肉といっていい。

こんな話は歴史上枚挙にいとまがない。

多くは物語であろうが、さりとてそれを否定する資料に乏しいのが現実である。

空想をたくましくして、見えない諸要因を探りだしてもそれこそ物語性を膨らますことになってしまう。

やはり後世に残った史実は、近代歴史学の父・ランケのいうように、それぞれの時代固有の**時代精神・時代正義**として厳然と存在するとしかいいようがない。

というわけで、かつてのエジプト紀行をなぞりつつ「クレオパトラとエジプトの王妃展」を考えてみたい。

ワセダハウス

最初にエジプトを訪ねたのは２００６年３月だった。

旅の主目的はルクソール（かつてのテーベ）のナイル西岸にある早稲田大学発掘調査事務所を訪ね、**王家の谷**など

Waseda House前で、ジェーンと

を見てまわることである。
　神鋼時代の友人、故川村治男君の実兄、元早大教授・**川村喜一氏（第一次調査隊長）**がここに眠っていると聞いていた。
　当時よくＴＶに出ていた早大エジプト学研究所長・**吉村作治氏**は、この４８歳で急逝した情熱の考古学者に私淑し、エジプト学を叩きこまれたと「私の履歴書」に書いている。

　身のほど知らずにわたしは日本を発つ前、大学に連絡をとった。
　あいにく吉村教授は不在だったが、代わりに応対してくれた助教授の近藤二郎氏（現所長）によると、この時期、現地事務所には誰もいない（一週間早かった）、広大な西岸クルナ村の村はずれにあるので探すのは多分無理だろうという。
　それでも行ってみた。思い立ったが吉日である。
　四泊した宿泊先フラットの女主人、ジェーンアクシャーさん（ルクソール博物館の考古学者、イギリス人）に頼みこんで、専属のドライバーに**ワセダハウス**を探し当ててもらったときは最高に嬉しかった。

　ワセダハウスは平屋で２００坪ほどあったろうか。施錠されていて中に入れなかったが、敷地をくまなく＜調査＞することができた。
　一隅に日本風の立派な石造りの墓がある。

　　『　*考古学者・川村喜一ここに眠る*
　　1978・12・28 早大古代エジプト調査隊建之　』
　亡き友人とその兄に手を合わせた。

ジェーンの「ルクソールニュース」

　ジェーンさんはこのワセダハプニングが気に入ったらしく、さっそく博物館の「ルクソールニュース」に紹介してくれた（以下参照）。

Luxor News　by Jane Akshar

News About Luxor, Egypt by Jane Akshar of Flats in Luxor located in Luxor.

Please feel free to email Jane (jane@flatsinluxor.co.uk) with any news items you would like to have posted.

Japanese House at Luxor

I have had a wonderful father and daughter Japanese visitors to my flats. As a guide I do get some unusual requests but this was the strangest. Could they visit the Japanese House. Well I didn’t even know there was a Japanese House until that moment but fortunately my regular taxi driver had heard of it.

As you go to the Valley of Kings you reach a cross roads. To the left is the Valley, to the right the temple of Seti I and straight ahead is the road to new Gurna. It was this road we had to take. Off road and up a dirt track we came upon Waseda House. The dig house for the Japanese team from Waseda University.

The Japanese father had remembered while preparing for the trip to Luxor that the his old friend , the late Mr. Haruo Kawamura’s brother was a professor of Egyptology at Waseda University, who taught Prof Sakuji Yoshimura the long time leader of the team.

Since he had graduated from the same university, he felt ok about contacting them for permission to visit the house. Unfortunately he found out that the house would be empty during his visit, but none the less wanted to go there.

ツタンカーメンの墓

When we arrived a guardian or bowab popped up from nowhere and escorted us round. He could not let us in to the house but took us round. There really was nothing to see but my guest was fascinated by everything, especially the old engineering of the pump that supplied the house with water.

But as we went round the third side of the house he had his reward! There in the garden was a memorial for Prof Kiichi Kawamura built in December 1979, apparently shortly after his premature death. It was laid out as a traditional Japanese tomb and inscribed in Japanese ‘the tomb of Kiichi Kawamura’

To say my guest was delighted is to understate the case. In fact I am not sure the tombs of the pharaohs in the Valley of the Kings

where I took him next lived up to his pleasure about being able to show his respects at this memorial.It just shows you that is a lot more to Luxor than you think.

王家の谷、貴族の谷、ハトシェプスト葬祭殿、デイル・エル・メディナ、ラムセウムなどをめぐった。

ジェーンさんの専門用語をふんだんに使うガイドぶりはさすがであるが、早口のアラブ訛り英語はわたしには分かりづらく、ほとんど娘の通訳にたよった。

「ツタンカーメンの墓は、めぼしいものはすべて博物館に移ってしまって、墓には何もありません。なのに法外な特別料金です。パスしましょう」

といわれ、代わりに彼女とっておきというＫＶ１４、１６、１９などの墳墓をいろいろと案内してもらった。

黄金マスク

ＫＶとは Valley of the Kings のことで、発掘された順に番号がついている。

１９２２年、ハワード・カーターによって発掘された２０世紀考古学史上最大の発見とされる**ツタンカーメンの墓**はＫＶ６２である。

ハトシェプスト葬祭殿

カルナック神殿　－ 光と音のページェント

ロンドンヒースローからルクソールに飛んだ。３月というのに気温３０℃を超える。ナイル東岸で２泊。

初日夕刻、**カルナック神殿**の「光と音のページェント」ツアーに加わった。

きらめくライトアップのなか、大音響のサウンドガイドにいざなわれて神殿の城門を通過、臨場感あふれる古代エジプトの光景を目のあたりにした。

カルナック神殿

ガイドの終盤は神殿裏庭の「聖なる池」の前にしつらえた観覧席にすわり、池面に映える神殿のライトの点滅と音響の飛び交うサラウンド効果に酔いしれた。

突然、近隣のモスクから午後７時半の祈りの時間を告げる大音響のラウドスピーカーが鳴りひびき、荘重な古代エジプトの雰囲気が台無しになってしまったのは残念だった。

モスクはそんなものらしい。

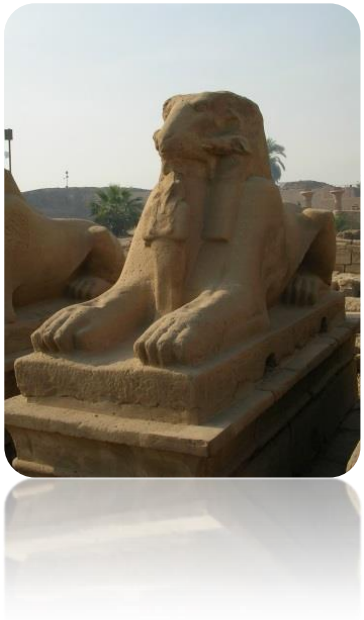
カルナック神殿の南約３キロに**ルクソール神殿**がある。

カルナックをテーベの**太陽神アメン**（太陽神ラーの代理神）の常住する本宮とすれば別宮にあたる。

秋の収穫祭の時期、アメン神はファラオを従え、前後を数多の神官・貴族・兵士たちにまもられてここに行幸する。

絢爛たるマーチングパレードは沿道に民衆のひれ伏すスフィンクス通りを威風堂々とすすむ。

自らを**最高神ラー**の化身とした新王国歴代のファラオたちは黄金のアメン神にぬかずくように付き従ったことであろう。



カルナック神殿の
スフィンクス通り

人類の壮大な舞台装置

聳え立つオベリスクや神殿の列柱廊・壁に刻まれたおびただしい数のレリーフを見ながら空想した。

紀元前１６世紀の古代に、これほどの大工事と精緻な彫刻作業がいったいどれだけの人数を動員し、どのような光景のもとですすめられたのであろうか。人類の壮大なドラマの舞台装置を見るおもいがした。

ちなみにこの時代は、古代中国では夏のあと殷王朝が興って間もないころである。夏はいうまでもなく、殷もまた薄明の中にかすむ伝説の時代だった。

それと同時代の圧倒的な人類の作品群が眼前にひろがっている。驚きというほかない。

三日目、ルクソールから約３００キロのアスワンまで南下。３時間の列車の旅だった。アスワン一泊。

翌早朝、さらに奥地へ４００キロ、エジプト最深奥部のアブシンベルへ飛んだ。

アブシンベル大神殿

アブシンベル大神殿 ―ラムセス２世

正面に巨大なラムセス２世（19 王朝、在位前 1279/1213）の石像が四体鎮座する大神殿である。横に王妃の小神殿がある。四体のうち一体は上半身がみごとに削りとられていた。盗掘である。

アブシンベル大神殿はファラオの威光を、当時南方から王国を脅かす蛮族が跳梁したこのヌビア地方にまで及ぼす意図をもって造営されたにちがいない。

今も昔も変わらぬ人間の権勢欲、征服欲に今さらながら目を見張った。

モニュメントゲート
（ルクソール、ナイル対岸）

ここで意味深なカゲの声が聞こえてきた。ダーウィンの声だ。

人間は自然進化論という巨大なシステムの中で生かされてきた以上、その掟に従わねばならないのだという。

不自由な＜足かせ＞　ー権勢欲もそのひとつー もあるが、これは必要悪である。

というより人間についてまわる体の一部だ。ラムセス２世はその中で生きぬいてきたのだ。

しかし現代人よ、目をこらせば足かせなど

のない真に自由な「絶対・一元世界」が見えてくるはずだ。
　進化がもたらした脳のフィルターを通してのみ対象を見るでない。
　それは蜃気楼のような仮想現実（ヴァーチャルリアリテイ）なのだから。
　蜃気楼の彼方に霞む釈迦やキリストやムハンマドは虚構ではないのか。いったい、彼ら聖者と１００人を超す正側王妃女官をほしいままにし１７０人に上る子をなした人間ラムセス２世とどっちが偉いというのか、と。
　まことに素朴だが、生き物として大事な設問である。

古代エジプトの神々

ティイ王妃（前１４世紀）

　そういえば、ティイ王妃（１８王朝、前 14 世紀）の額には２匹の冠をかぶった**聖蛇ウラエウス**がとりつき、頭上には日輪をもつコブラが取り巻いている。
　森羅万象を信仰の対象とした古代エジプトの神々はその数五百とも千ともいわれるが、なぜか最高神ラーに関係する神々の多くには蛇やコブラがまとわりついている。
　人類に初めて脳を与え、人類たらしめた祖先が、２億５千万年前の**爬虫類**だったことと関係があるのだろうか。
　エジプトでは古代から諸学問（天文学や数学など）が発達していたから生命の歴史も知り尽くしていたかもしれない。
　神々は爬虫類を崇め、人間に脳が与えられたことに感謝したのではないか。

　わたしはトカゲは与しやすいが、ヘビは大嫌いだ。神殿のレリーフの中のヘビには目もくれず、トカゲかカメを探した。
　彼らに頼んでテーベの神アメンに厄介な人間の脳を返上し、身軽になって真の絶対世界に遊んでみたい気分がある。
　やっとのことで４匹のトカゲを見つけた。宿の近くの農道を散歩中、３匹が目の前をちょろちょろと横切った。わたしは現代トカゲには用がない。目指すは古代トカゲである。

神殿のレリーフの中に１匹見つけたが、これがいかにも小ぶりで頼りなかった。これではアメン神への取次ぎなど期待できそうにない。

そう思って脳の返上は諦めることにした。

脳がなくなれば生きていけないからだが、少々の足かせ・煩悩は覚悟の上で余生を人間らしく生きる生き方を優先したいとおもう。

アスワンハイダム

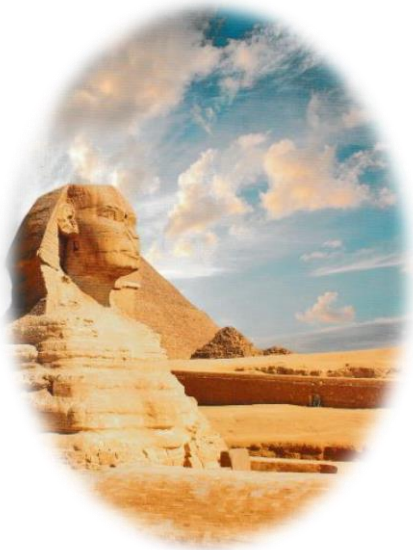
アスワンハイダム

アブシンベルを後にしてアスワンへ取って返し、アスワンハイダムとフィラエ島にある**イシス神殿**を見てまわった。

アスワンハイダムは１９６４年、ナセル大統領によってつくられた長さ３８３０メートル、高さ１１０メートルの重力式ダムである。

上流５００キロにおよぶ面積約４０００平方キロの人造湖・ナセル湖は世界最大。高々とそびえるアーチ式ダムを想像していたが、意外に低い。

が、水量はさすがである。堰堤本体底部の地下に６つの大トンネルをうがって放水し、１２基のタービンをまわす。発電量 １７５０００ＫＷｘ１２も以外に少ない。ナセルはこのダム建設の費用を捻出するためにスエズ運河の国有化を宣言し、列強とのスエズ戦争をまねいた。



ギザの大スフィンクス
（古王国第４王朝第４王朝 前26世紀）

夜遅く列車でルクソールにもどり、ナイル西岸のジェーンのフラットへ（四泊）。

何でもない暮らし － 大地とともに

このところ進化論的宗教論に取りこまれているわたしは、どこへ行って何を見たかだけの物見遊山には興味がわかない。

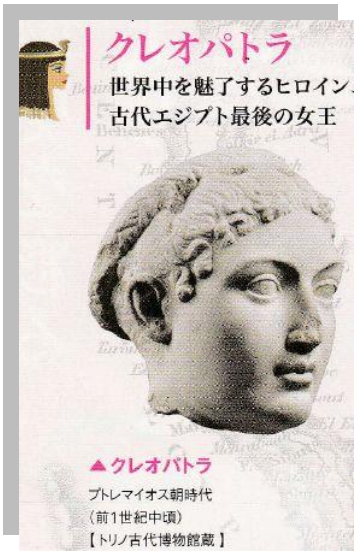
エジプトは人類文明発祥の源流には違いなく遺跡の宝庫であるが、その大本にある

人間(生命)存在とはなんぞや、という原点に関心が向いてしまう。

たとえばである。人なつっこいフラットの女主人の義父、アクシャー氏（エジプト人）の、どう見ても生産的とは思えないその日ぐらしである。それが興味を引く。

存外、そんな何でもない暮らしの中に現代社会が抱える問題を解くヒントがあるのではないかと考えてみた。

まだ５０代半ばの彼は、日がな一日、使用人と一緒にフラットの管理をして暮らしている。



といって格別の仕事があるわけではない。たまにプールまわりの片付けをしているだけである。

プールサイドで休んでいるわれわれ（ほかに誰もいない）にニコニコしながら寄ってきて、ひと言「これ美味しいよ」（ヌビア語？）といってエジプト茶を置いていく。

近くに住む家族とも別居し、三階建てフラット一階の片隅にある物置のようなところでごろごろ寝泊りしている。そのほうが性にあうようだ。

それでも一日５回(4:35、12:10、15:30、18:10、19:30）、使用人とともに庭に敷物を敷いて五体投地の祈りを欠かさない。

悠久の大地とともにある暮らしである。

エジプト人のバクシーシ！

ここで興味深い、ある友人のエジプト人観にふれる。

クレオパトラ７世の頃の誇り高きエジプト人と、事ごとに**バクシーシ！**（チップ）といって手を出す現代の彼らはいったい同一民族なのだろうかと、この友人はいぶかる。

かれは現役時代にカイロに立ち寄ったとき、＜抜け目のない＞（とかれはいった）エジプト人たちのバクシーシ！攻めにあい、手をやいたらしい。

万物は流転し、民族は興亡する

ヘラクレイトスの指摘するとおり、古代ギリシャから今日まで＜一日として同じ日はなく＞変転し続けてきた時空の流れをおもえば何の不思議もな

いのだが、歴史を断片として捉えればこの友人の感想どおり誰もがそうおもうに違いない。

ルクソール・ナイル西岸を望む

世界最長の大河ナイル

赤道直下のビクトリア湖近く、ルウェンゾリ山５１００メートルの氷河に源を発する**白ナイル**と、多雨地帯で名高いエチオピア高原のタナ湖を源流とする**青ナイル**を上流にもつナイル川は世界最長６６９０キロである。地球の半径より３００キロも長い。

狭義には白・青ナイルの合流するほぼ中間点、スーダンの首都ハルツームあたりから下流をナイルと呼んでいる。エジプトに入るのはさらに１５００キロ下流である。

エジプトはナイルの賜物

歴史の父ヘロドトスはこういったが、エジプトを旅していると、この言葉が実感を帯びてくる。

肥沃な土壌を水源流域から運び、６～１０月の河川氾濫期にエジプト、とくにデルタ地帯を沃野にした。

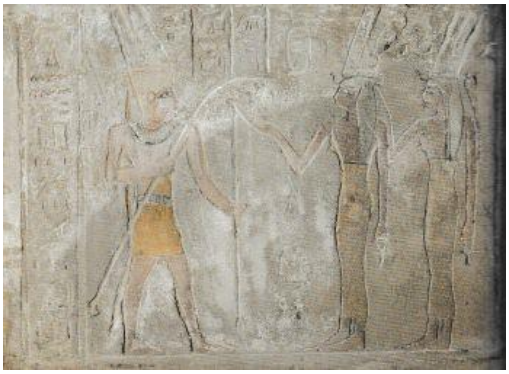
人類の文明はここに発祥し、歴史時代がはじまった。

ナイルは水量の多さもまた図抜けている。京都府に匹敵する面積約４０００平方キロに及ぶ巨大なナセル湖からも想像できる。

万一、アスワンハイダムが決壊すれば、ルクソールなどは一気に押し流され、カイロやアレキサンドリアを含む広大なデルタも３メートル水没するだろうといわれる。

それにしても、わたしなど疑問がわく。

暑熱の大砂漠のど真ん中をゆったりと、アスワンから延々１２００キロも流れるうちに水が蒸発したり、熱砂に吸い取られることがないのだろうかと。驚くべき水量である。



アメン神を礼拝する２人の女性神官

遺跡保護というエジプトの課題

関連した話をルクソールで聞いた。ナイル沿岸の幅５、６キロの農地が、地下水が砂漠地獄に吸い取られないように要所要所に鋼矢板が打ち込まれて保護されているという。

あるいは、アスワンハイダムの建設によって肥沃な土壌がナセル湖でせき（アメン神妻として）止められ、エジプトの地味はやせ細っていると。

さらには、ナイルの氾濫がなくなったぶん、地下水の塩分が濃くなり、毛管現象で上ってきた塩分が結晶化して遺跡を破壊しているという調査結果がある。

これを受けて、エジプト観光局が主要遺跡について地下水の入れ替え工事に踏み切ったという最新ニュースを聞いた。

カルナック神殿列柱廊
レリーフを見る

別の調査では、ナセル湖から蒸発した水蒸気が下流に雲をよび、集中豪雨禍をもたらして遺跡を浸蝕しているといわれる。

歴史の皮肉ともいえるが、しかし、エジプトの場合、明らかに人為の引きおこした現象である。

ここで思いおこすのは１６世紀、大航海時代のスペインのこと。

繁栄にわくスペインは新大陸からの銀や世界から集めた物産をはるばる南のアンダルシア・セビリアから陸路で首都マドリードに運んでいた。

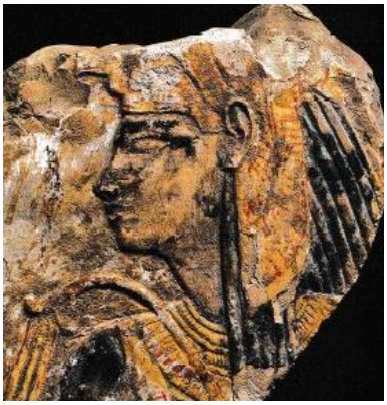
「タホ川を大改造して、一気にリスボンから運べないか」

当時、ポルトガル王をかねた実務家フェリペ２世の一声で、屈曲する奇岩怪石の山岳水路を変える国家プロジェクトが検討され、決定が教会にゆだねられた。

が、合議制の教会は決定に２００年を要し、あげくの果て、

「 今ある姿は神の意思、背くわけにはいかない 」

として、これを反故にした。



彩色した王妃のレリーフ

これは笑い話ではない。教会の慧眼に敬意を表するエピソードでもない。脱自然をめざした人為が文明を築いたことは紛れもない事実だが、そこにはおのずと越えてはならない一線があることに人間は気づかなければならないということである。

核兵器と地球温暖化の問題

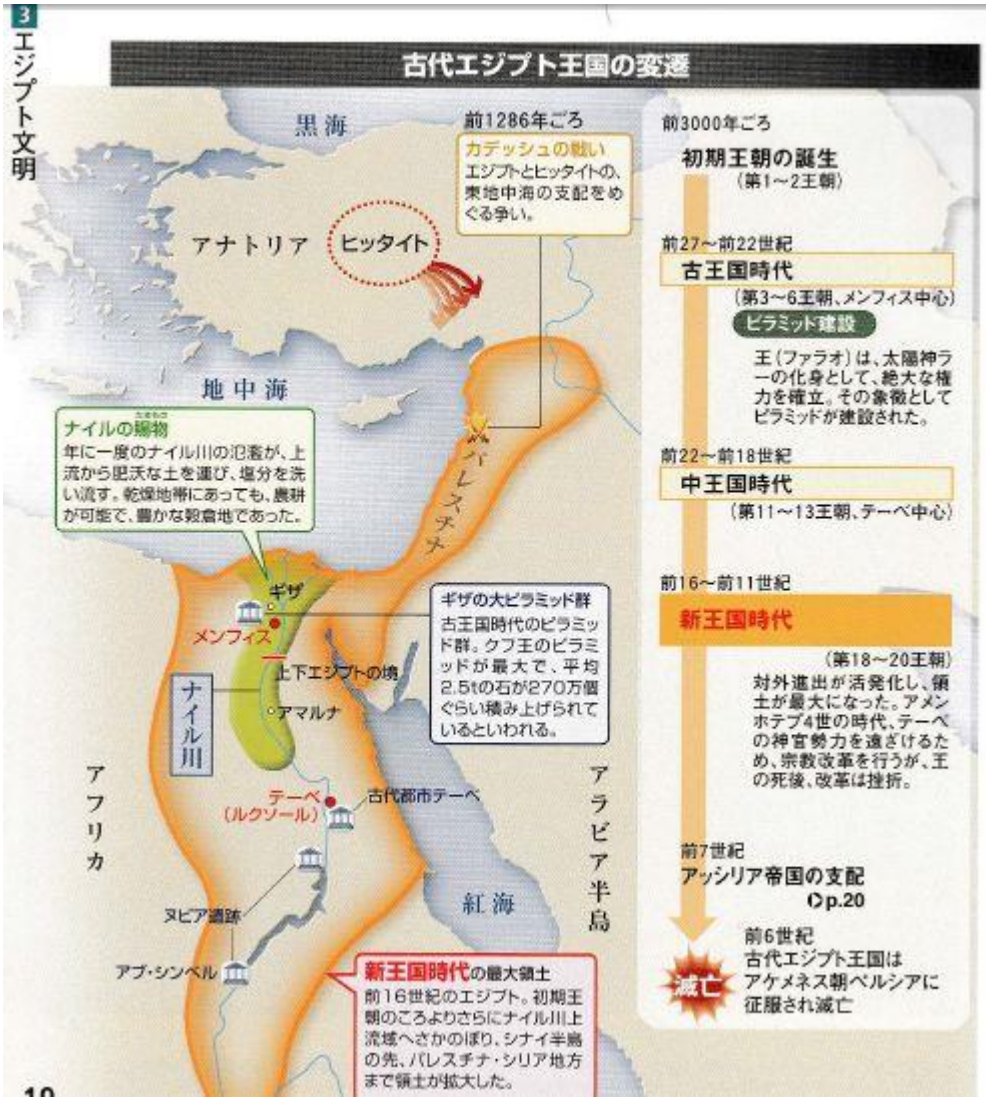
核兵器と地球温暖化や環境汚染の問題である。
この二つが現代における最大の人為禍であることを人類は知っている。人間とはまことに厄介な生き物である

時あたかも今週、二つのニュースがあった。
一つは１８年ぶりに**地球温暖化対策**(COP21) について合意を目指す「パリ協定」が１９６カ国・地域の参加のもとで採択されたこと。当然ながらこれは大歓迎である。
今一つは日本が、核不拡散条約未加盟のまま核兵器を保有したインドと「日印原子力協定」に合意し、原発輸出をすすめることになったこと。
これは一体どうしたことか。**「核なき世界」**づくりを先導すべき日本にとって、タブーだったはず。

こんな不条理な外交がまかり通り史実になっていくのはなぜだろう。
人間の世界では、理想は絵に描いた餅ということか。
カンドウ神父は何というだろう。

斎　藤　勝　郎
kats-saitoh-mk@zeus.eonet.ne.jp

古代エジプト王国の変遷



古代エジプト地図

ギザの 3 大ピラミッド

右からクフ、カフラー、メンカウラー王のピラミッド

古王国第 4 王朝第 4 王朝 前 26 世紀

4 人の王妃　―その姿と実像

クレオパトラ
世界中を魅了するヒロイン、
古代エジプト最後の女王

ティイ
王に愛され、国を支え、
権勢を誇った“ザ・王母”

ハトシェプスト
敏腕にして辣腕、
エジプト史に君臨する女王

ネフェルトイティ
美女来たり。
華やかなアマルナの王妃

▲クレオパトラ
プトレマイオス朝時代
（前1世紀中頃）
【トリノ古代博物館蔵】
＊展示期間：10月10日（土）～11月23日（月・祝）
それほど作品が残されていないクレオパトラを表した、貴重な一点。巻き髪の表現や制作技術がプトレマイオス朝時代の特徴を示すものと考えられます。
© Archivio Soprintendenza per i Beni Archeologici del Piemonte e del Museo Antichità Egizie

▲アメンヘテプ3世の王妃ティイのレリーフ
新王国・第18王朝時代 アメンヘテプ3世治世
（前1388～前1350年頃）
【ブリュッセル・ベルギー王立美術歴史博物館蔵】
アメンヘテプ3世の寵愛を受け、ツタンカーメンの祖母でもある王妃ティイ。このレリーフが発見された墓の全貌がいま明らかになりつつあります。
© RMAH
▶「ティイのレリーフ発掘現場映像」を公式サイトで公開中
http://egypt2015.jp/

▲王妃ハトシェプスト
新王国・第18王朝時代 トトメス2世～ハトシェプスト女王治世
（前1492～前1458年頃）
【ボストン美術館蔵】
若々しい姿で表現された王妃ハトシェプストの小型の彫像。男装の女王とも呼ばれる彼女の、女王になる前の姿を伝えるものです。
Gift of Mrs. Joseph Linden Smith in memory of Joseph Linden Smith, 52.347, Museum of Fine Arts, Boston. Photograph © 2015 MFA, Boston

▲王妃の頭部
新王国・第18王朝時代 アクエンアテン王治世
（前1351～前1334年頃）
【ベルリン・エジプト博物館蔵】
アメンヘテプ4世が築いた「アマルナ時代」の特徴を持つ像。王の改革を支えた王妃ネフェルトイティ（ネフェルティティ）のものと思われます。
Staatliche Museen zu Berlin – Ägyptisches Museum und Papyrussammlung, inv.-no. ÄM 21246, photo: Sandra Steiß

主役は王妃と女王。
ファラオを支え、国を支えた女性たち

ルーヴル美術館、大英博物館、ボストン美術館など、世界各国の名だたる美術館・博物館から集結した名品約180件によって、古代エジプト史を彩る王妃や女王たちに迫ります。謎に包まれながらも今なお語り継がれるエジプト最後の女王クレオパトラ（クレオパトラ7世）をはじめ、魅力的な人生を送った彼女らにまつわる逸品の数々を紹介します。

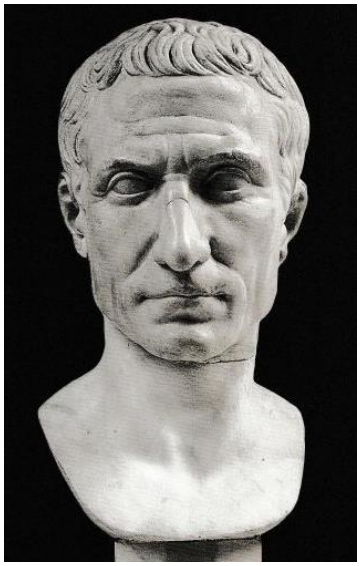
▲王妃ヘテプヘレス2世とその娘メレスアンク3世
古王国・第4王朝時代 メンカウラー王治世
（前2514～前2486年頃）
【ボストン美術館蔵】
Harvard University - Boston Museum of Fine Arts Expedition, 30.1456, Museum of Fine Arts, Boston. Photograph © 2015 MFA, Boston

神の柩とメナト形のおもり▶
末期王朝時代
（前664～前332年頃）
【ガンダーコレクション】
© Fondation Gandur pour l'Art, Geneva, Switzerland. Photographer : André Longchamp

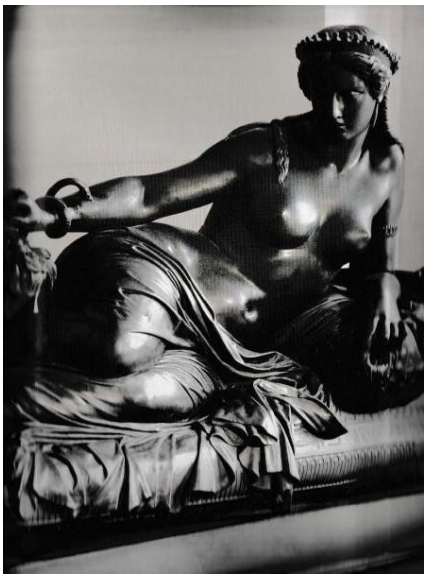
▲王妃ヘテプヘレスの肘掛椅子（複製）
【原品】古王国・第4王朝時代
スネフェル王～クフ王治世（前2614～前2556年頃）
【ボストン美術館蔵（原品はカイロ・エジプト博物館蔵）】
Gift of Mrs. Charles Gaston Smith and Group of Friends, 38.957, Museum of Fine Arts, Boston. Photograph © 2015 MFA, Boston

◀ウジャト眼の首飾
新王国・第18王朝時代
（前1550～前1292年頃）
【ウィーン美術史美術館蔵】
Kunsthistorisches Museum Vienna

記念講演会
10月10日（土）13:30－15:00（開場13:00）　会場：国立国際美術館 地下1階講堂　定員130名　当日10:00から整理券を配布　参加無料・要観覧券
「遺跡に見る古代エジプトの女王・王妃たち：発掘調査の現場から」近藤二郎氏（早稲田大学文学学術院教授／同大学エジプト学研究所所長／本展監修者）
＊その他のイベント情報は、決まり次第公式サイトに掲載します

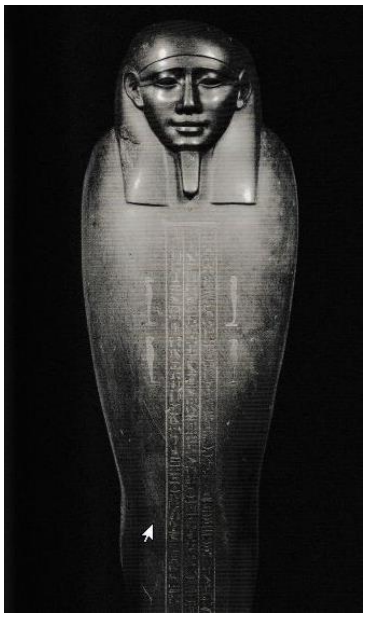


プトレマイオス 15 世（カエサリオン）
の父、英雄カエサル（イタリア出土）



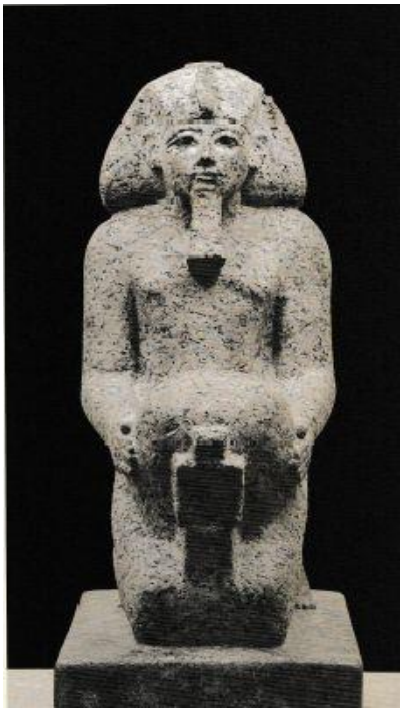
クレオパトラ
右手に腕輪のように毒蛇が絡みついている
ダニエルドクレ作(1852・53)
（マルセイユ美術館）

クレオパトラの死
アッキーレ・グリセンテイ筆（1878/79）
イタリア・プレシア市立美術館



プトレマイオス朝時代の玄武岩製石棺
（大英博物館）
表面にヒエログリフの銘文

神々を崇拝する王女イシスのステラ（石碑）
オシリス神に聖水を注ぐ
20 王朝ラムセス 6 世時代（前 1140/1132））



壺を捧げるハトシェプスト女王
付け髭の男装
18 王朝（前 1473/1458）

アクチウムの海戦（前 31・9）
アントニウスは比較的軽量な 350 隻の船を
オクタビアヌスの重量級 200 隻の艦隊に向かって並べた
船首にケンタウルス（右、アントニウス）
対するオクタビアヌスの軍艦（左）
ケンタウルスは上半身人間、下半身馬の怪物